

技術資格に挑戦してみませんか



取得した資格：1級土木施工管理技士
資格取得年度：令和5年度

いたばし かずき
板橋 和輝*

1. 受験の動機・経緯

私が受験をした動機は、発注者として1級土木施工管理技士（以下「1級土木」という。）を保有する受注者と仕事をする機会が多かったためです。受発注者が一体となって、より良いものを施工するためには、発注者も同等の知識を持つことが大切だと考え、参考書を購入するなど受験を意識するようになりました。

しかし、科目数が多く合格する自信がなかったことに加えて、受験申込書の受験資格や実務経験証明が複雑に感じられ、受験資格を満たしたはずの令和4年度の申込期限がいつの間にか過ぎていました。

翌年、職場内で1級土木を保有している年齢の近い先輩職員に話を伺う機会があり、今まで遠く感じていた1級土木がより身近に感じて受験を決意することができました。

2. 第一次検定とその対策

第一次検定は4肢択一のマークシート方式でした。各問題の点数は1点で、総問題数は65問でした。合格点は公表されており、得点が全体の60%以上である必要がありました。また、総問題数65問の中には、施工管理法（応用能力）が15問含まれており、そこでも60%以上の得点が必要でした。つまり、総問題数のうち39問以上、かつ施工管理法（応用能力）のうち9問以上正解することが合格の条件でした。

試験は午前の部が2時間30分、午後の部が2時間と2回に分かれていました。

午前の部は、土木一般、法規、専門土木の3つの科目に分かれ、土木一般は15問出題のうち12問、法規は12問出題のうち8問、専門土木は34問出題のうち10問の計30問を選択して解答しました。対策として、土木一般及び法規は、出題数と解答数に大きな差がないことから、どの問題が出題されても良いように幅広く勉強しました。反面、専門土木は出題数と解答数の差が大きいことに加え、道路、河川、鉄道、上下水道など細分化されていたことから、自分の経験のある分野に特化して勉強することが効果的であると考えました。

午後の部の施工管理法は、必須科目であるのに加えて、第二次検定対策にも繋がるため、第一次検定の科目で最も重点的に勉強するのが良いと思います。勉強方法としては、自分の不得意分野を特定するため、イラスト入りでわかりやすい参考書を3回繰り返し学習しました。その後は、通勤時間を利用してひたすら過去問を解きました。過去問は答え及び解説までまとまっているウェブサイトがあるのでぜひ検索してみてください。

また、かなり昔の問題でも再出題されることがあるため、より複数年度の問題を解くことが合格に繋がった点と感じています。ただし、いきなり問題を解くと味気なく挫折の要因にもなりますので、やはり最初はわかりやすい参考書を購入して自信をつけ

*千葉県 病院局 経営管理課 病院建設室 技師

ることをお勧めします。

なお、第一次検定は試験終了時刻まで在席すれば試験問題を持ち帰ることができるため、持ち帰って自己採点を行うことを強くお勧めします。

例年、第一次検定は7月、合格発表は8月、第二次検定は10月頃となりますが、合格発表を待ってから第二次検定対策を開始すると、2か月間しかありません。自己採点を行い合格点を超えていることを確認したうえで、第一次検定の翌日から第二次検定対策を行うことで、より長い対策期間を確保できます。併せて第一次検定の対策段階から第二次検定を意識した勉強ができれば良かったと感じています。恥ずかしい話ではありますが、私はマークシート方式という都合の良い単語だけが頭に入ってしまう、記述問題を初めて見たときに絶望してしまいました。そのためか、第二次検定の方が難しい印象であり、限られた時間の中で効率的に第二次検定の対策を行うことが合格の鍵であると思います。

3. 第二次検定とその対策

第二次検定は記述問題でした。合格基準は全体得点の60%以上ですが、配点は公表されておらず、自己採点はできません。

記述問題には経験記述が含まれており、与えられた課題に対して、自身の経験をもとに論文を書く必要がありました。また、第一次検定でも取り扱った施工管理法に関する問題も出題されたため、より詳細に勉強して暗記する必要があります。

経験記述の対策としては、毎年3つの課題（安全・品質・工程管理）のうち、いずれか1つが出題されていたため、それぞれの課題に対する論文について、文字数を意識しながらパソコンで作成し、実際に書いて覚えました。私は独学であったため、他者に添削を依頼することはできませんでしたが、可能な方は第三者に添削をしてもらうことで、より良い結果が得られると思います。

また、工事名や工期及び工事概要も記述する必要がありますことから、可能な範囲で工事を絞る方が良いと思います。私は、当時最も多難と感じた工事を選

択し、関連書類を精査することで、1つの工事でいくつかの論文を書けるようにしました。

施工管理法に関する記述問題の対策としては、重要な単語を厳選して覚えることで、試験当日に肉付けして答えられるようにするのが良いかと思います。過去問においては、穴埋めの位置を変えた記述問題が出題されることがあるため、ただ解くだけではなく、問題の重要な単語を見え消しにして覚えるなど、過去問を利用して自分で新しい問題を作成する勉強方法が効率的であったと感じています。

4. 受験者へのアドバイス、励まし等

試験当日のアドバイスとして、想定と異なる問題が出題されても慌てずに解答することが重要かと思っています。私が受験した際は、第一次検定において、例年の「適当でないものはどれか」といった出題形式から「適当でないものの数」を解答するような出題形式に変わっていました。つまり、4肢の正誤を全て判断しなければならなくなり、難易度が上がりましたが、試験時間には余裕があると思いますので、慌てずに問題を確認してみてください。

また、日々の業務がある中、資格取得の勉強時間を確保するのはとても大変かと思いますが、あまり難しく考えないでください。私も最初は公務員に資格は不要で+αくらいに考えていたのですが、1級土木での勉強は日々の業務で非常に役立つ資格であり、重要な単語が上手くまとまっている参考書は今でも活用しています。受験勉強は、業務を実施するうえで必要となる知識が幅広く学べ、受験の可否以前に非常に良い経験になったと感じております。

私が受験した際の合格率は、第一次検定が49%、第二次検定は33%でしたが、第一次検定に合格すれば、たとえ第二次検定に落ちても、翌年度以降からは第一次検定の免除を受けることができます。私のように難しく考え、受験を躊躇している方も多いかと思いますが、今までの経験を整理するくらいの気持ちでぜひ気軽に挑戦してみたいはいかがでしょうか。

本稿を読んで、少しでも1級土木を身近に感じ、受験してみようと思う方が増えれば幸いです。

【著者紹介】板橋 和輝（いたばし かずき）

平成30年度千葉県入庁。県土整備部君津土木事務所、一宮川改修事務所で設計・監督業を経て令和6年度から現職。